

世界初！超簡単な脳波計測による感情のリアルタイム計測装置の開発と近未来テクノロジー

慶應義塾大学理工学部教授／医学部精神神経科学教室兼担教授

満倉 靖恵 氏

経歴

学位：博士（工学）博士（医学）
現職：慶應義塾大学理工学部教授／医学部精神神経科学教室兼担教授
株式会社イーライフ取締役CTO、8illion 株式会社取締役CTO、電通サイエンス
ジャム取締役CTO、FeMup株式会社代表取締役社長、IKI Inc.、米国代表取締役
社長／IKI JAPAN代表取締役社長／TBS 7days newsコメンテータ など
生体信号解析、リアルタイムノイズ除去、脳神経科学、精神疾患の研究に従事
IEEE、日本高次脳機能障害学会、日本神経心理学会、電気学会などの正会員
著書：「フキハラの正体 なぜ、あの人の不機嫌に振り回されるのか？」（ディスカ
ヴァー・トゥエンティワン）など

要旨

本講演では、私が取り組む多岐にわたる研究を通じて、女性研究リーダーとしての可能性と挑戦について共有します。

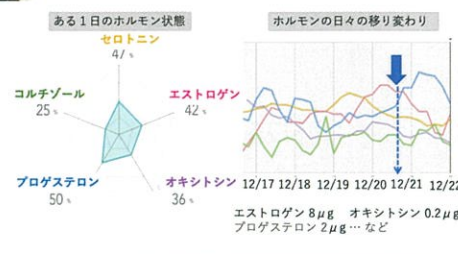
開発した“感性アナライザ”は、リアルタイムで感情を可視化する世界初の装置であり、完成までに17年もの歳月を要し2013年に完成しました。これと同時にスタートアップを立ち上げ、感性の科学的理解に革新をもたらしました。現在ではカリフォルニアにも拠点を持つスタートアップを始め、9つのスタートアップを立ち上げました。私の特許技術は、心理学や行動科学、さらには産業分野へと発展を遂げています。また、人を対象とした研究においては、脳波やホルモンなどの生理データを多角的に解析し、生活の質を向上させるための新たな知見を提供しています。これらの研究は、異分野の知識を統合し、実社会に役立つ技術革新を目指す私の信念に基づいています。

本講演では、これらの研究成果を紹介するとともに、研究者としてのキャリア形成やリーダーシップの重要性について議論し、次世代の女性研究者の活躍を後押しするきっかけを提供できればと考えています。

脳波と脈波の関連性を取得→ 脈波だけで感情を認識



ホルモンの移り変わりが見える装置



薬学部健康生命薬科学科
教授 中瀬 朋夏

〈グローバル共同研究〉

難治性乳がん悪性化の機序解明と新治療戦略の創出

要旨

現在、日本において、20～39歳（AYA世代後期）のがん患者の約80％は女性であり、そのがん種は乳がんが最も多いです。乳がんに対しては、多くの治療薬の誕生により、がんの中でも、抗がん治療をリードしています。しかし、乳がんは、忘れた頃に、転移や再発を引き起こし、効いていた抗がん剤が、突如、効かなくなることがあり、まだまだ治療が難しい病気です。乳がんのさらなる治療成績の向上と根治のため、未だ大部分が不明な乳がんの悪性化機構の解明とそれに基づく新治療戦略の創出は強く求められています。我々は、乳がん細胞を用いて、悪性化プロセスを再現するモデルを開発し、別の治療に用いられている医薬品や身近にある栄養素が乳がんの治療に役立つことを明らかにしてきました。これまでにない新視点から乳がんの謎に迫り、分かってきた乳がん治療のヒントについて報告します。



心理・社会福祉学部
社会福祉学科
講師 野上 恵美

〈架橋横断的重点共同研究〉

外国にルーツを持つ児童・生徒の学習意欲に関する社会福祉学的研究

要旨

私たちは、日本で生活する外国にルーツを持つ児童・生徒の学習意欲を高める要因について、社会福祉学的視点に基づき研究を行っています。今回の報告では、学校環境、言語環境、支援環境という三つの環境における事例を踏まえ、複雑な環境の中で学習に取り組むことを求められる外国にルーツを持つ児童・生徒は、直接的な支援が求められると同時に、児童・生徒に関わる大人（保護者、教師、支援者）への間接的な支援も重要になってくることを示します。そのうえで、「学校現場で求められる支援」と「家庭内で求められる支援」について具体的な実践方法を提示します。さらに、学校でも家庭でもないNPOが「第三の居場所」として学校と家庭の結節点となり得るかどうかについて検討します。



音楽学部応用音楽学科
教授 一ノ瀬 智子

〈架橋横断的重点共同研究〉

多分野介入による認知症予防教室における音楽活動の有効性

要旨

武庫川女子大学健康科学総合研究所（旧栄養科学研究所）における認知症予防教室は、認知機能の改善と有用な予防法の開発を目的として2021年より実施されています。

当教室では、健康・スポーツ学、心理学、食物栄養学、看護学、音楽の5つの専門分野が連携して包括的なアプローチを通じた認知症予防の実践と研究を行っており、運動と栄養の分野では運動能力の向上や身体組成の改善、回想法や音楽を活用した介入では精神的賦活に寄与する有効性が明らかになっています。

本発表では取り組みの一環として行われている音楽活動に焦点を当て、歌唱、楽器演奏を中心としたプログラムによる具体的な介入方法と現時点で得られている成果、ならびに評価における課題について報告します。